家忠日記　十八之十九

リ 5
2687
9

2687
9

家忠日記追加巻之十八

自慶長六年至同十年

平井文庫

慶長六年辛丑

正月大

一日　大神君旧冬ヨリ御不例ニ依テ諸士参賀セス

十五日　大神君御不例快然ニ依テ列侯以下大阪ノ城ニ登テ新正ヲ祝ス　大神君御壮衣束シ着セラ賀ヲ受ケ玉フ

十八日　大神君池田三左衛門尉輝政シ召テ御茶入

兎騅
肩衛ヲ玉ル

此月松平和泉守家乗ニ上州郡波ヲ轉テ濃州
岩村ノ城食邑二万石ヲ賜ル野州宇都宮ノ城食
邑十万石奥平大膳大夫家昌ニ賜ハル

二月小

三日 台徳院殿池田輝政カ宅ニ渡御アリ先日
大神君ヨリ賜ル御茶入ヲ以テ茶會ヲ催シ郷食膳ヲ
献ス 台徳院殿ヨリ御太刀白銀ヲ輝政ニ賜ル
此月 大神君領地ノ諸将ニ賜ル

上野国箕輪ノ城十二万石ヲ轉テ江州佐和山ノ城食邑
十八万石井伊兵部少輔直政上總国大多喜ノ城十万石
ヲ轉テ勢州桑名ノ城食邑十萬石本多中務大輔
忠勝忠勝カ旧領本多喜五万石本多内記忠朝忠勝カ次
男後出雲守ニ改ム上州鳴渡ノ城二万石ヲ轉テ濃州大垣ノ城
食邑五万石石川長門守康通上州白井ノ城二萬
石ヲ轉テ三州岡崎ノ城食邑五万石本多豊後
守康重武州河越ノ城二万石ヲ轉テ上州厩橋ノ
城食邑三万三千石酒井河内守重忠上州布川

五千石ヲ轉テ常州土浦ノ城食邑三万五千石松平
勘四郎信一（後伊豆守ト改ム）武州八幡山一万石ヲ轉テ三州
吉田ノ城食邑三万石松平与次郎家清（後玄蕃頭ニ改ム）上州
宮崎二万石ヲ轉テ濃州加納ノ城奥平美作守信
昌下總国小南三千石ヲ轉テ遠州掛川ノ城食邑
三万石松平三郎四郎定勝（後隱岐守ニ改ム）上州久留里ノ城三
萬石ヲ轉テ遠州横須賀ノ城松平出羽守忠政（大須賀）
武州寄西二万石ヲ轉テ常州笠間ノ城食邑三万石
松平周防守康重三州吉良本多遠殿助康俊武
州松山二万石ヲ轉テ遠州濱松ノ城食邑五万石松平左
馬允忠頼上総国二万石ヲ轉テ駿州沼津ノ城食邑三
万石大久保次右衛門尉忠佐豆州韮山ノ城ヲ轉テ駿州
府中ノ城内藤三左衛門尉武州河越五千石ヲ轉テ上
州郡波食邑二万石酒井雅楽頭忠世中郡五千石ヲ
轉テ上總下總両国ノ内食邑一万五千石青山常
陸介忠成下總国小美川一万石ヲ轉テ三州深溝ノ
城食邑一万石松平亦八郎忠利（後主殿頭ニ改ム）駿州興国寺
ノ城食邑一万石天野三郎兵衛尉康景尾州小

河ノ城食邑二万石水野三左衛門尉分長（後備後守ニ改ム）
州黒田ノ城三万三千石ヲ轉テ筑州神戸ノ城食邑五
万石一柳監物直盛肥前国加賜四万石旧領合テ拾
二万石寺沢志ノ守廣高伊予国二万七千石ヲ轉テ
豊後国日田玖珠郡見三郡食邑一萬七千石来
島右衛門康親江州ニ於テ加賜二千石旧領合テ七
千石永井右近大夫直勝上総国勝浦ニ於テ加賜二
千石旧領合テ五千石植村土佐守泰忠ニ賜ル

三月大

三日武州河越三千石ヲ轉テ駿州田中ノ城采地二万石
酒井備後守忠利ニ賜ル
廿三日 大神君大坂ノ城ヨリ伏見ノ城ニ移リ玉フ大坂ノ
城御留主居トシテ天野三郎兵衛尉康景ヲ西丸
ニ残シ置ル（明年三宅摂右衛門尉康貞ニ代テ天野康景関東ニ下ル）
廿四日 台徳院殿大坂ノ城ヨリ伏見ノ城ニ渡御
廿七日 台徳院殿御入洛
此日秀頼權大納言ニ任ス（元權中納言）
廿八日 台徳院殿權大納言ニ任シ玉フ（元權中納言）

廿日下野守忠吉侍従ニ任シ従四位下ニ叙ス元従五位下

廿九日　台徳院殿　参内

四月小

十日　台徳院殿伏見ヲ出玉テ東国ニ赴セ玉フ

十五日佐竹義宣伏見ニ到ル

五月小

十一日羽柴利光元服本姓前田後利常ト改ム年時十三歳侍従ニ任シ

大神君ヨリ松平ノ姓ヲ賜テ松平筑前守ト号ス

廿一日寺領ノ印ヲ高野山ニ附シ且ツ宗門ノ法式五ケ

條ヲ定玉フ

高野山寺領寄附状

一七千石　但紀州伊都郡内　内訳中

一弐千石　内千石ハ頂学ニ流配ス青巌寺領

都合九千石

右領知永代ニ寄附申候間全ク寺領

相違不仕天長地久南無阿弥陀仏天下泰平

四海静謐精祈者也

元和五年　五月廿日　家康

金剛峯寺ニ於ル所作

高野山中法度條々

一所住行人法ニ背ク住持ハ可追放事

一衆徒方領内ニ人ヲ置ク事不可有之

上山下ニ法師無道ニ成時ハ二三人ノ名主
人ヲ示合可申ニ付ハ名主ハ人ヲ出シ
ニ成ル方ハ行人方ヲ出シ成敗ヲ
任所法師ニ成シ所法方人ヲ出シ成敗ヲ
可申ニ

一青巖寺ニ於ル所作 ニ成シ寺領所務ニ
村米并菜米ハ中ノ寺ノ所務ニ
何シ山林ノ伐採ス

一青巖寺二十名ニ内ノ名ト住持校法
領シ科ノ名ヲ所法中預ル所ノ人ノ者
所ニ右八人ニ内別加ニ時ニ学僧ニ中宮
堂ニ学者住ル所ハ跡ヲ長昇住ス
付ニ堂ニ寺ノ院加賀ニ而住一代ヲ
一法師無ク破壊ニ時ニ所法行人方ヘ

中臣ノ氏ヲ賜ヒテ[illegible]お[illegible]と封記
注ヲ添テ[illegible]注ノ益ヲ[illegible]
理免ス[illegible]
右[illegible]
[illegible]可相[illegible]
[illegible]六年六月廿日　家康

金剛峯寺衆徒中

廿五日西郷孫九郎忠員卒ス　年廿　嗣子ナキニ依テ
釣命ヲ奉テ弟若狭守忠員孫九郎カ家督ヲ

續リ

六月大

十四日松平内膳正廣忠卒去ス　二十九歳
廿五日彦坂小刑部卿助氣ヲ蒙ル
廿八日松平筑前守利光中納言利長カ家督ヲ
續リ　利光実ハ利長カ四男利長カ弟
此月　大神君諸国ノ主ニ命テ膳所カ崎ニ城ヲ
築カシメ玉フ奉行八人是ヲ監ス　天下ヲ普ク治メ玉フ後城ヲ築カシメ始ナリ
不日ニ城成ル戸田左門一西台命ヲ蒙テ

大津ノ城ヨリ膳所ノ城ニ移ル一西膳所ニ在ルヿ三年ニシテ死ス

七月小

一日中納言景勝居城ヲ発テ洛ニ赴ク

廿四日景勝洛ニ到ル去年ヨリ三河守秀康ニ因テ赦免ヲ乞フ依之大神君其罪ヲ宥ラレ今日入洛スルノ旨也

八月小

廿四日景勝カ領スル所會津ノ地百万石ヲ減セラレ米澤ノ地三十万石ヲ賜ル家上出羽守義光ニ命テ景勝カ領内酒田ノ城ヲ請取ラシム此城景勝カ臣河村兵蔵志田修理亮等楯籠テ城ヲ渡サス依之出羽守カ三男清水大蔵大輔及ヒ楯岡甲斐守ヲ部将トシテ本城豊前守鮭延越前守志村伊豆守野辺沢宮内少輔白石備前守里見越後守加藤源左衛門尉等二万五千余騎山形ヲ発テ月山ノ嶽ヲ越テ酒田ノ城ニ向フ城兵志田河村此告ヲ聞テ酒田ノ城ヨリ兵ヲ出シテ最上川ヲ前ニ當テ陣ス清水カ軍勢川岸ニ臨テ諸卒川ヲ渉ラントト相進ムト

云ヒ折節川水増テ渉ル夏ヲ得ス然ル処ニ十余
町川下ヨリ猟舩十四五艘ニ取乗ヲ年義光カ味
方ニ属スル下次右衛門尉川ヲ渉テ向ノ岸ニ上ル志田
河村軽卒ヲ指揮シテ火炮ヲ放テ夥ク是ヲ拒ク
下次右衛門尉カ先隊ノ兵鉄炮ニ中テ死傷ノ者多シ
依之下カ軍士等猶豫シテ進ムヿヲ得ス下カ親
族戸井半右衛門尉先鋒ニ進ミ勇ヲ震テ士卒ノ
機ヲ励ス于時清水大蔵大輔川ヲ渉テ下次右衛門
尉ヲ援ヲ志田河村歇ノ大勢川ヲ渉シテ競ヒ来
ルヲ見テ伍ヲ乱シテ敗走ス下次右衛門尉利ニ乗テ
酒田ノ城ニテ是ヲ追討首級百余ヲ得タリ部将大
蔵下ニ續テ酒田ノ城ニ発テ城ヲ囲テ奮撃戸
沢九郎五郎政盛後ニ右京亮ト号スカ臣戸沢相模守城下ノ
民屋ニ放火シテ清水ト同ク城ヲ囲テ是ヲ攻ム城将
志田河村カヲ尽テ拒キ戦フ此ニ到テ寄手ノ隊
長加藤源左衛門尉矢ニ中テ死ス里見越後守
先登ニ進ミ大手ノ橋ヲ渡テ城門ニ攻入ル志田河
村是ヲ拒クト云ヒ寄手ノ猛勢競ヒ攻ルノ間防ク

事ヲ得ス遂ニ和ヲ請テ大蔵大輔ニ降ル大蔵大
輔是ヲ許テ志田河村カ一命ヲ助ケ酒田ノ城ヲ
請取リ志村伊豆守ヲシテ是ヲ守ラシメ大蔵大輔歳帰
廿五日景勝カ旧領ノ内會津六十万石ヲ蒲生藤三
郎秀行後飛騨守ト号ス ニ賜ル

九月大

八日松平外記伊昌卒去ス四十二歳

晦日 台徳院殿ノ姫君三歳ニ時御輿加州ニ入テ松平
筑前守利光ニ嫁シ玉フ大久保相模守忠隣青山
常陸介忠成是ヲ送リ奉ル安藤對馬守重信伊丹
喜之助康勝後播磨守鵜殿兵庫頭久志本左馬助等供
奉ス越前国金沢ニ於テ大久保相模守乗輿ヲ渡ス
前田對馬守是ヲ請取ル青山常陸介御貝桶ヲ渡
ス長九郎左衛門尉是ヲ請トル此姫君三男五女ヲ
誕生ス長男筑前守光高次男淡路守利次三男
飛騨守利治長女森右近大夫忠政ニ嫁ス三女松
平安藝守光晟ニ嫁ス四女ハ條知忠親王ニ嫁ス
二女五女早世

台徳院殿江戸ニ還御ヲ
此秋寺領三千石ヲ山社領一萬石ヲ豊国ノ
廟ニ寄附セラル
禁裏供給ノ地及ヒ家ノ食邑ヲ洛陽四辺ニ定ラル
板倉四郎右衛門尉勝重（後伊賀守ト号）加藤喜左衛門尉ヲ
シテ京職ヲ掌ラシ玉フ

十月大

十二日　大神君伏見ノ城御首途東国ニ赴セ玉フ米津
清右衛門尉稲垣平右衛門尉岡田竹右衛門尉ヲ伏見ノ
城番ニ残シ置ル（故有ヲ聞ス）ニ著御
十三日　大神君佐和山ニ著御
十四日大垣ニ著御
十五日岐阜ニ著御納ニ著御城地ヲ御巡見アリ
十六日　大神君濃州四十太夫重利ヲ召テ帰参ス是
十八日　台徳院殿山利十八歳遠州濱松ノ城中ニ於テ
ヨリ先キ天正　年東ヒ丑朝大手ノ門外ニシテ既
坂作主膳正ト口論ヲ出奔シテ井伊直政カ許ニ
ニ主膳正ヲ殺シ濱

往テ蟄居ス同十八年小田原合戦ノ時直政ニ属テ
相州ニ趣キ小田原ノ城籠曲輪夜軍ノ時戦功有テ
疵ヲ被ル其後亦直政カ家ヲ去テ蒲生飛騨守氏
郷ニ属シ奥州九戸カ逆乱ノ時軍功有テ槍疵ヲ
被ル度々ノ戦功台聽ニ達シ召テ再ヒ御家人ニ属ス

十一月大

五日　大神君江戸ノ城ニ入リ玉フ千時畠山義真（後長川守ト号ス）始テ　大神君ニ謁ス

九日　大神君忍河越ニ狩シ玉フ

廿日　大神君江城ニ還御

此年青山常陸介忠成ヲ江戸町奉行ニナサシメ玉ヒ
関東諸奉行ノ兼役シテ本多佐渡守正信内藤
修理亮正成等ト同ク是ヲ務ム内藤外記正重ヲ
歩行頭トナサル（土井甚三郎カ元祖）青山善四郎重長ヲ歩
行頭トナサル（父善兵衛正長カ元祖）大久保荒之助忠直軽卒頭
鉄炮トナサル

此年豆州下田五千石ヲ轉テ三州田原ノ城食邑
一万石戸田土佐守尊次ニ賜ル

此年浅野左京大夫幸長従四位下ニ叙シ紀伊守ニ任ス松平三郎四郎定勝従五位下ニ叙シ隱岐守ニ任ス本多彦四郎康紀従五位下ニ叙シ豊後守ニ任ス松平与次郎家清従五位下ニ叙シ玄蕃頭ニ任ス松平勘四郎信一従五位下ニ叙シ伊豆守ニ任ス水野藤次郎重仲従五位下ニ叙シ對馬守ニ任ス松平善四郎康安従五位下ニ叙シ石見守ニ任ス山口半左衛門尉重政従五位下ニ叙シ但馬守ニ任ス此年重政ニ武州ニ於テ食邑五千石加賜セラル去年御味方ニ属スル小川左馬助今ニ至テ本領聊モ

宛行レス是ハ何時モ弱ヲ見捨強ニ附ノ由諸人訟ルノ故カ此年大久保五郎右衛門尉忠俊卒去ス七十八歳

慶長七年壬寅

正月小

一日江戸ノ城ニ於テ台徳院殿大神君ニ謁シ玉ヒ新春ノ賀シ玉フ群臣各正旦ノ賀儀ヲ献ス

六日　大神君従一位ニ叙シ玉フ元正二位

十九日　大神君江戸ノ城御首途有テ伊勢路ヲ経テ

洛ニ赴セ玉フ

二月小

一日 丹伊兵部少輔直政卒去ス 四十二歳

十四日 大神君伏見ノ城ニ入玉フ

三月大

七日 紀伊大納言頼宣誕生 幼名常陸介始諱頼将母ハ正木氏後養珠院ト号ス

十三日 大神君伏見ノ城ヨリ大坂ニ渡御

十四日 大神君大坂ノ城ニ入御有テ秀頼ニ御對顔アリ

十五日 大神君大坂ヨリ伏見ノ城ニ還御去年ヨリ奥州

岩崎表ニ揆蜂起スルニ依テ南部信濃守利直去冬兵ヲ発テ退治セント欲スルノ処ニ寒風膚ヲ破リ深雪道ヲ埋テ進退自由ナラス依之利直暫ク兵ヲ収テ居城ニ帰リ此春再ヒ兵ヲ発テ一揆ノ悪徒ヲ攻討ツ此時白石ノ一揆等是ニ与シテカヲ合スルト云ヒ利直遂ニ一揆ヲ退治ス

此春水野隼人正忠清 大神君ノ勅命ヲ奉テ台徳院殿ニ奉仕ス従五位下ニ叙シ書院番ノ頭ト成テ奏者番ヲ兼役ス

四月小

六日内藤四郎左衛門尉正成武州柄間ノ郷ニ於テ
病ニ卧ス累世旧功ノ御家人タルニ依テ　台徳院殿
御愛憐有テ醫者久志本左京亮ヲ柄間ノ郷ニ
指遣ハサレ療養ヲ加ルトヱ重病タルニ依テ昔月
十三日遂ニ卒ス　七十六歳
十一日薩摩大隅安堵ノ印ヲ嶋津龍白（後理大夫義久入道）ニ賜ル
廿八日　大神君伏見ヨリ御入洛

五月小

一日　大神君参内
二日　院参　女院御所　千時猿楽アリ
三日　相国寺ニ詣テ玉フ
四日　伏見ノ城ニ還御
八日佐竹右京大夫義宣カ領地常州八十万石ヲ減
テ秋田磯沢二十万石ヲ賜（始秋田五万石ヲ賜ル故有テ後仙北十五万石ヲ加賜ス）松
平周防守康重松平五左衛門尉一生由良信濃守
菅沼与五郎藤田能登守ニ命テ常州水戸城ヲ
守ラシム本多佐渡守正信大久保相模守忠隣鈞

命ヲ奉テ常州ニ赴キ国中ノ制法ヲ定ム其夜畢テ
後正信忠隣江戸ニ帰ル
佐竹カ押ヘトシテ松平伊豆守信一命ヲ奉テ常州
江戸崎ノ城番ヲ勤ム其子信吉後安房守ト号ス同国府
中ノ城ヲ守

六月小

一日伏見ノ城経始
十一日本多上野介正純大久保石見守ニ命シテ南
都東大寺ノ宝蔵ヲ開キ蘭奢待ヲ切セラル
勅使勧修寺右大辯光豊廣橋右中辯総光
勅ヲ奉テ宝蔵ヲ封ス
廿八日肥前国ヨリ飛脚江戸ニ到来シテ黒船着岸
スルノ由注進ス船中ニ乗ル処ノ者凡二千二百余人

七月大

本多正信大久保忠隣常州水戸ヨリ江戸ニ帰テ後松
平周防守康重モ居城笠間ニ帰ル車丹波守其子
所左衛門尉馬場和泉守其子新助大窪兵蔵等
首将トシテ佐竹浪人ヲ招キ集一揆ヲ企水戸ノ城ヲ

伺フ于時大窪兵蔵カ家人潛ニ城中ニ忍入シトス松平
五左衛門尉カ番所ニ於テ是ヲ生捕テ詰問スル処ニ彼
レカ懐中ヨリ一揆ヲ企ルノ回文ヲ索メ得タリ則是ヲ
縛ス周防守康重カ城中ニ残シ置ク家人等檄
ヲ笠間ノ城ニ飛テ是ヲ告ル康重急ニ馳来テ水戸
ノ城ニ入ル其夜亥ノ刻ニ及テ一揆多勢ヲ率テ競ヒ
来テ三ノ丸ヲ攻ム城兵矢ヲ発シ火炮ヲ飛テ夥ク是
ヲ防ク間一揆ノ賊徒利ヲ失テ退リ翌日城将等
相謀テ車丹波守ヲ擒ニシ其外一揆ノ張本人等
悉ク是ヲ生捕ル松平丹波守太田ノ城ニ於テ馬場和
泉守ヲ生捕テ水戸ノ城ニ遣シ則此由ヲ江戸ニ注進
ス検使トシ安藤五左衛門尉大久保甚右衛門尉水戸
ニ来テ其支ヲ汐汰シテ後両使一揆ノ張本五人ヲ
推ケテ江戸ニ帰ル云徒ノ残黨ニ示サレンカ為ニ亦水戸
ニ引返シテ彼地ニ於テ逐ニ斬罪セラル
有馬法印（俗名中務少輔則頼）卒去ス嫡子玄蕃頭豊氏丹波
国福智山ノ城ニ居テ別ニ采地六万石ヲ領スヘシ父ノ法
印カ遺跡摂州有馬郡三田ノ城食邑三万石ヲ

豊氏ニ加賜ス依之旧領合テ八万石ヲ領ス
大神君松平源七郎カ娘ヲ御養女トシテ豊氏ニ嫁
セシメ玉フ本多中務大輔忠勝及ヒ一位ノ局ヲ相副テ
婚礼ノ儀式ヲ調ヘシメ玉フ千時御腰物御脱指ヲ
豊氏ニ賜ル豊氏カ家臣吉田掃部助ヲ御前ニ召
テ御腰物ヲ賜ル
廿月　大神君ノ勅命ヲ奉テ松平伊豆守信一常州
江戸崎ノ城ノ警衛其子信吉ニ代テ同国水戸ノ
城番ヲ勤ム信一水戸ノ城ニ在ル十余年七月下旬ヨリ翌年二月ニ至ル信吉常州府中
ノ城番六郷兵庫頭ニ渡シテ父ニ代テ江戸崎ノ城番ヲ勤ム
八月小
廿九日　大神君母公御太方逝去春秋七十五歳傳通
院殿光岳蓉誉知香大禅定尼
此秋土佐国ニ唐船寄来ルノ由注進ス
十月大
二日　大神君伏見ヲ出テ江戸ニ赴セ玉フ
十八日中納言秀忠逝ス二十二歳
十一月

八日 平三郎四郎（千時十一歳後遠中守ト号ス）遠州掛川ヨリ江戸ニ
来テ 午多佐渡守ニ信ヲ以テ 上聞ニ達ス召テ
西ノ丸ニ登テ 大神君ニ謁ス寒天ノ参府御感ノ
仰ヲ蒙ル本城ヨリ来レル者誰カアルノ由御尋ノ
処ニ青山七右衛門尉候ス即青山ヲ召テ鈎命ニ曰隠
岐守定勝カ三男遠州ヨリ来テ 台徳院殿ニ仕ヘント
欲ス定則我カ寄子ナルノ由ヲ命有テ同明善
阿弥ヲ相副テ青山七右衛門尉ト共ニ本城ニ登
テ大久保相模守忠隣ヲ奏者トシテ三郎四郎始メ
台徳院殿ニ謁ス
廿六日 大神君江戸ノ城御首途洛ニ赴セ玉フ
此日 武田万千代（大神君ノ御子母ノ氏ニ依テ武田ト号ス）ニ常州水戸
ヲ賜ル（元下総国佐倉ニ居玉フ）
十二月
四日 駿河ノ東山大佛殿失火
廿五日 大神君伏見ノ城ニ入御
廿八日 洛嶋津忠恒伏見ニ来テ 大神君ニ謁ス浮田
八高日 島津忠恒カ領内ニ蟄居スルノ由ヲ達ス

此年下総国小美川ノ城食邑一万石土井甚三郎利勝ニ賜ル下野国壬生日根野織部忠吉明上総国畔蒜郡ノ内久留里郷食邑二万千石土屋民部少輔忠直ニ賜ル常州多賀郡食邑四万石戸沢九郎五郎政盛ニ賜ル下総国ニ於テ加賜二千石高木善次郎三次同国臼井ノ郷五百石青山大蔵少輔幸成ニ賜ル

此年中坊飛騨守秀祐始テ　大神君ニ謁シ御家人ニ属シ吉野郡ニ於テ食禄ヲ賜ル奥平信昌カ三男忠政ニ松平ノ姓ヲ賜テ松平摂津守ト號ス弟松平下総守忠明小幡ヲ轉テ三州江州西国ノ内ニ於テ采地ヲ賜リ三州作手ニ住ス

此年阿部四郎兵衛尉忠政（始名四郎五郎）　數年大久保忠隣カ許ニ閑居ス　台徳院殿忠政カ老衰ヲ聞召シ及ハレ　大神君ニ請テ忠政ヲ御前ニ召ス于時忠政七十三歳

慶長八年癸卯

正月大

一日諸大名悉ク夜中ニ大坂ニ赴キ秀頼ニ謁シ新正ヲ祝ス其賀儀畢テ後大坂ヲ発シテ伏見ニ赴ク是ハ旧冬ヽ晦日　大神君諸士ニ命シテ曰明春正旦ノ慶賀先ツ秀頼ニ参賀スヘキノ旨仰ニ因テ也

二日郡臣伏見ノ城ニ登テ　大神君ニ謁シ新正ノ賀儀ヲ献ス

十五日松下石見守重綱遠州久野ノ城ヲ転テ常州筑波郡小張村ニ於テ食邑一万石ヲ賜ル内千石ハ勢州平尾村蕨村ニテ旧ノ如ク賜テ常州ニ移ル

此月甲斐国ヲ五郎太丸義利（後義直ト改ム）ニ賜ル池田藤松（于時五歳　大神君ノ御外孫輝政カ次男）ニ備前国ヲ賜テ伏見ノ城ニ登テ拜礼ス于時　大神君ヨリ御腰物（吉光）　台徳院殿ヨリ御脇指ヲ賜ル藤松幼年タルニ因テ兄新蔵利隆藤堂ニ代テ是ヲ知ル

二月大

六日信州川中島ヲ転テ美作国ヲ賜ル右近大夫

忠政ニ賜ル川中島ノ上潮ケ忠輝ニ賜ル元下潮国櫻井ニ居ス

十二日　大神君為征夷大将軍賜牛車兵杖同日

為淳和奨学両院別當源氏長者右大臣ニ任シ

玉フ

此日秀康参議ニ任シ従三位ニ叙ス池田輝政少将ニ任

此年板倉四郎右衛門尉勝重叙従五位下伊賀守ニ

任ス

廿一日　大神君伏見ヨリ御入洛

廿五日　大神君将軍宣下ノ拜賀

行列

一番　御物　御物　調夕十人　同朋善阿弥　騎馬

二番　御出奉行　板倉伊賀守

三番　雑色

四番　随身各騎馬

右本多藤四郎　渡辺半蔵

左山上弥四郎　嶋田清左衛門　鵜殿善六郎

右横田弥五右衛門　高木九助

左近藤平右衛門

五番　白張七人
六番　諸大夫歩行

右竹中采女正　衣筑後守　三好備中守
左佐々木民部少輔　近藤信濃守　松平若狭守
三好越後守　内藤左京進　秋元但馬守
戸田采女正　石川主殿頭　酒井丹後守
松平右衛門佐　松平出雲守
永井右近大夫　三浦監物

七番御車　布衣　右　米津清右衛門
布衣　左　成瀬小吉

中山左助　柴田左近　横田甚右衛門
安藤彦兵衛　榊原甚五兵衛　阿部左馬助
日下部五郎八　長谷川久五郎　伊奈熊蔵
豊島主膳正　林　藤五郎　朝比奈弥太郎
加藤喜左衛門　鳥居九郎右衛門
石川半十郎　都築与五右衛門

御剱役

八番騎馬諸

松平甲斐守

松平飛騨

本多上

本多豊

九番　越前

若狭

安藤

献物

主上

親王

女院

女御　銀子　百枚

銀子　三十枚　新大すけゐ
同断　　さんのすけゐ
銀子　五十枚　ぎもんゐ
同　　三十枚　めすけゐ
同断　銀子　　大かちん人
銀子　二十枚　新ゐしゐ
　　十枚　　いよゐ
同　　五枚　　ひこやゐ

同断　　ひかん見ゐ
銀子　十五枚　ひすけの前ゐ
同　　十二枚　女孺四人
同　　二枚　　ひたりさ二人
同　　六枚　　ひたの一二人
同　　五枚　　うちゐ
同断　　　　　おちん人
同断　　　　　ひやこのおろ
銀子　三枚　　ろもんのうこゐ

銀子　三十枚　内ノ内ハ一人

四月大

十六日　大神君京都ヨリ伏見ノ城ニ還御

廿二日　秀頼内大臣ニ任ス　元権大納言

六月小

四日越前国九岡ノ城食邑四万石本多飛騨守成重ニ賜ル

七月大

三日　大神君伏見ヨリ御入洛

十五日　大神君京都ヨリ伏見ノ城ニ還御

廿八日　台徳院殿ノ姫君（天壽院殿　于時十一歳）豊臣秀頼（于時十七歳）ニ嫁シ玉フ　此時　大神君ハ伏見ノ城ニ御座ス

台徳院殿ハ江戸ニ御在城アリ　御臺（崇源院殿）姫君ノ御送リトシテ伏見ニ赴セ玉ヒ諸具ヲ調ヘ婚礼ノ儀ヲ修シ玉フ　此時崇源院殿伏見ニ於テ一女ノ誕生ス　姫君後ニ京極若狭守忠高ニ嫁シ玉フ

船ニ乗テ伏見ノ城ヨリ大坂ニ至リ玉フ　大久保相模守忠隣乗輿ニ従フ　西国大名河辺ヲ警固ス

黒田筑前守長政弓槍鉄炮各三百ヲ以テ是ヲ守
ル堀尾信濃守人夫三百ニ粮ヲ持シメ先行ス御
船ノ通リ難キ処ニ至テ粮ヲ以テ開道ス大神君此事ヲ後ニ聞召テ堀尾カ所為ヲ御感悦有テ黒田カ支ヲ悦ヒ玉ハス秀頼ノ家臣等相議テ曰ク
姫君ノ御輿大手ノ橋ニ到ルヘシ橋ヨリ本城ノ玄
関ニ到テ畳ヲ敷テ白綾ヲ以テ其上ヲ覆ヘシト
兼テ是ヲ相定ムルノ処ニ片桐市正カ曰ク　大神君美
濃ヲ好ミ玉ハス貴慮ニ應スヘカラサルノ由強テ制
スルニ因テ此事ヲ止ム姫君ノ御輿大坂ノ城ニ入ル
大久保相模守忠隣乗輿ニ従フ浅野紀伊守幸長ヲ
シテ乗輿ヲ迎ヘシム

八月小

十日水戸中納言頼房誕生幼名鶴丸亦左衛門督母ハ頼宣ト同シ
十四日松平因幡守康元卒去ス五十二歳嫡子甲斐
守忠良家督ヲ續ク
十八日浮田八郎ヲ九州ヨリ召テ豆州八丈島ヘ
配流セラル

九月小

十一日武田信吉逝去 ニ十一歳

十月大

三日 大神君山岡道阿弥カ宅ニ渡御アリ道阿弥饗膳ヲ献ス山岡主計頭景以カ嫡子新太郎景本（時ニ十八歳）ヲ道阿弥養子トシテ今日始テ大神君ニ謁ス常陸国古渡ニ於テ食邑一万石賜

慶長九年甲辰

正月大

七日江戸ノ城新正ノ賀儀例ノ如シ

十五日新庄駿河守直頼（宮内卿法印ト号ス）大神君及ヒ台徳院殿ニ謁ス濃州関ケ原一戦ノ時直頼石田三成ニ属テ伊賀国上野ノ城ニ楯籠ル其罪ニ因テ蒲生藤三郎秀行ニ預ラレ奥州會津ニ閉居ス直頼元来 大神君ニ忠志有ト云ヒ上方一偏ニ石田カ下知ニ従フノ間直頼一人是ヲ背テ其志ヲ立テ難キニ因テ本意ニ非ス三成ニ属シテ一旦上野ノ城ニ楯籠ル此旨安ク

台聽ニ達スルノ間其罪ヲ赦免有テ召テ御家
人ニ屬ス

二月大

四日　台德院殿鈞命ニ因テ東海道及ヒ越後
海道奥州海道ニ各一里塚ヲ築シメ玉フ御家
人是ヲ監ス同年五月下旬ニ到テ成就ス

三月小

一日　大神君江戸ノ城御首途洛ニ赴セ玉フ時
豆州熱海ノ温湯ニ七日御入湯アリ

廿四日黒田如水卒去ス六十九歳俗名官兵衛孝高
廿七日　大神君伏見ノ城ニ着御
廿九日　大神君池田輝政カ宅ニ渡御アリ輝政
饗膳ヲ献ス千時輝政ニ禄數多賜ル室家
大神君ノ御娘ニ黄金二千両ヲ賜ル

四月小

廿日参議秀康江戸ニ来リ玉フ　台德院殿江
城ニ於テ是ヲ饗シ玉フ
廿一日　大神君浅野紀伊守幸長カ家ニ渡御

アリ　廿日松平五左衛門一生卒去ス　三十五歳

六月大

十日　台德院殿御入洛

廿三日　台德院殿參内　此日松平丈八郎忠利

從五位下主殿頭ニ任ス　水野三左衛門尉分

長從五位下備後守任ス

七月小

十七日武州江戸ノ城ニ於　大猷院殿御誕生毋

云ハ浅井備前守長政女　酒井雅樂頭忠世御

模擬撰字
守恐衍

脇差ノ役ヲ勤ム

廿日　大神君宰相秀康ノ家ニ渡御　相模守ヲ

見玉フ

十八日菅沼織部正定盈卒去ス　六十三歳

閏八月小

十四日伏見ヲ出玉ヒテ江戸ニ赴セ玉フ

十二月大

廿日山岡道阿弥卒ス　六十二歳俗名備前守　養子新太

郎景本若年ノ名ニ依テ景本ト名ヲ實又主計ト

景以釣命ヲ奉テ景本ニ代テ道阿弥カ遺跡
五千石ヲ續テ与力同心等ヲ支配ス
此月松平伯耆守忠一（本姓中村初名一学）家臣横田内
膳正ヲ誅ス其故ハ頃年忠一勇ミ誇テ国政ヲ
乱ス依之横田強テ忠一ヲ諫ム忠一是ヲ怒テ
家人安井清一郎近藤善右衛門尉天野景業
道家長右衛門尉（道家ハ大神君ヨリ忠一カ室家ニ附ケシテ忠一ニ嫁セシメ玉フ者ナリ松平因幡守康元カ娘）等
謀ル近藤善右衛門尉猶忠一ヲ諫テ是ニ与セス
忠一横田ヲ城ニ招テ終日宴シ其虚ヲ伺ヒ忠一横
田ヲ切ル横田衆ヲ被テ次ノ坐ニ進レ出ル忠一及
ビ三臣等是ヲ追フ横田カ刀ヲ以テ次ノ坐ニ候
ケル童子主ノ刀ヲ以テ急ニ忠一ヲ切ル大野景
業手ヲ以テ是ヲ受ケ留ル依之宗業右ノ手ニ
衆ヲ被ル安井道家等彼童子ヲ殺ス近藤
善右衛門尉ハ此企ニ与セスト云ヒ忠一若年ニシ
テ武功ノ横田ヲ誅センヿヲ危ク思テ近藤長
刀ヲ携ヘ其坐ニ間ヲ隔テ密ニ是ヲ相伺フ処ニ

横田麻ヲ殺テ看逃レ出ル近藤是ヲ待請テ遂ニ
横田ヲ殺ス内膳正カ嫡子横田主馬助是ヲ聞テ已
カ居城飯山ノ城ニ楯籠テ旗ヲ揚ル忠一カ家人
柳生五郎右衛門尉ヲ始數輩主馬助ニ与シテ飯山
ノ城ニ馳加ル忠一兵ヲ発テ飯山ノ城ヲ囲ム雲州ハ
隣国タルニ依テ堀尾帯刀吉晴同信濃守忠氏父
子援兵トシテ伯州ニ発テ忠一カ軍勢ニ来會シ兵
ニ飯山ノ城ヲ囲テ攻討城兵能ク拒キ戦フ間寄
手ノ軍勢命ヲ殞シ麻ヲ殺ル者多シ柳生五郎右衛
門尉兵法達者タルニ因テ其術ヲ尽スト云氏忠一カ家
人藤井助兵衛尉遂ニ柳生ヲ討捕ル寄手ノ猛勢
競ヒ攻ルノ間城兵遂ニ利ヲ失テ城ニ火ヲ放テ横田主
馬助及ヒ城兵悉ク自殺ス依之近国騒ク騒動ス此
由 大神君ノ上聞ニ達ス是ヲ怒リ玉テ安丹清一郎
近藤善右衛門尉天野宗兼道家長右衛門尉等
四人ヲ江戸ニ召テ御糺明有テ後各殺害セラル近
藤善右衛門尉ハ始ヨリ忠一ヲ強テ諫メ此企ニ与セ
ス横田ヲ彼レカ殺ストハ云氏其罪ヲ宥ラル後年

忠一江戸ニ参候スル時横田ヲ誅スル罪ニ依テ江戸ニ入
ル事ヲ得ス品川ノ駅ニ蟄居スヽ日ヲ経テ後赦免ヲ
蒙リ忠一遂ニ江戸ニ至テ　大神君ニ謁ス青山雅
楽助達成（後大蔵少輔ト改ム）卿勘氣ヲ蒙テ閉居スト云ヒ此
年十二月卿免ヲ蒙リ卿前ニ侍ス
此年山内土佐守一豊従四位下ニ叙ス于時　大神君ヨ
リ卿茶入（坐正ヲ一豊ニ賜）松平伊豆守信一従四位
下ニ叙シ其子信吉従五位下ニ叙シ安房守ニ任ス山口
駿兵衛尉直友従五位下ニ叙シ駿河守ニ任ス安藤五
左衛門重信従五位下ニ叙シ對馬守ニ任ス
此年松平三郎四郎定綱（後越中守ト号ス）下総国山川領ノ内采
地五千石ヲ賜ル同国臼井ノ城ヲ轉テ上野国高崎
ノ城食邑五万石酒井宮内大輔家次ニ賜ル常州貝原
村ニ於テ永地千石永井傳八郎尚政（後信濃守ト号ス）ニ賜ル
此年朝鮮人来聘ス　僧松雲（孫之或金孝舜）

慶長十年乙巳
正月大

一日江城ノ慶賀例ノ如ク諸士参賀ス

三日

條々

一喧嘩口論堅停止之上依親類縁者之好見贔屓之輩於有之者本人ゟ從以可為曲事

一御上洛中人返之儀令停止之訖雖然中分由有之ハ下知之上ニ而可斷事

一路次中之儀如御事書之旨可申付事

一諸事其主人可承旨可下知事

一路次中宿之儀奉行人任指圖事

一不可有押買狼藉事

一船渡之儀先次第ニ為一其誡其身以下可為曲事

附他之手之衆与論之儀一切停止之事

右條々若於違背者ハ速可處嚴科者也

慶長十六年正月三日

九日大神君江戸ノ城御首途洛ニ赴セ玉フ御痳病発ルニ依テ駿府ノ城ニ御滞座

二月小

五日　大神君駿府ノ城ヲ出御

十九日　大神君伏見ノ城ニ着御

廿四日　台徳院殿江戸ノ城御首途洛ニ赴セ玉フ供奉ノ輩十万余人此日神奈川ニ着御

廿五日　台徳院殿藤沢ニ着御

廿六日　小田原ニ着御

廿七日　三島ニ着御連日雨降ル故ニ此ニ三日御滞坐

三月大

二日　台徳院殿浦原ニ着御

三日　駿府ニ着御　四日藤枝ニ着御

五日　掛川ニ着御　六日濱松ニ着御此ニ一日御滞坐

八日　吉田ニ着御　九日岡崎ニ着御

十日　清洲ニ着御　十一日忠吉ノ家ニ入御猿楽アリ

十三日　大垣ニ着御　十四日伐和山ニ着御雨ニ依テ此

ニ三日御滞坐　十六日永原ニ着御

十七日　膳所ニ着御　三日此ニ御滞坐供奉ノ輩ヲ待

玉フ　廿一日行粧ヲ整ヘシメ　台徳院殿伏見ノ

城ニ入玉フ　　廿九日　台德院殿參内

四月大

七日　將軍與奪　八日　大神君伏見ヨリ御入洛

十日　大神君參内　十二日秀頼右大臣ニ任ス元内大臣

十五日　大神君伏見ニ還御

十六日　台德院殿征夷大將軍源氏長者淳和奨學

両院ノ別當ニナリ玉フ

同日任内大臣叙位二位聽牛車隨身兵杖

同日三河守秀康權中納言ニ任ス下野守忠吉左近

衛左中將ニ任シ從三位ニ叙ス元侍從從四位下上總介忠輝左近

衛權少將ニ任シ從四位下ニ叙ス元從五位下池田新藏利

隆侍從ニ任ス榊原小十郎康勝從五位下叙シ遠江

守ニ任ス松平三郎四郎定勝從五位下ニ叙シ越中

守ニ任ス大久保右京亮教隆從五位下ニ叙ス同主

膳正幸信從五位下ニ叙ス高力左近大夫忠房從

五位下ニ叙ス青山雅樂助幸成從五位下ニ叙ス

永井傳八郎尚政從五位下ニ叙シ信濃守ニ任ス

高木善次郎正次從五位下ニ叙シ主水正ニ任ス秋

田東太郎實孝従五位下ニ叙シ城介ニ任ス松平善
四郎正朝従五位下ニ叙シ壹岐守ニ任ス板倉周防
守重宗従五位下ニ叙ス板倉内膳正重昌従五位下
ニ叙ス
廿六日　台徳院殿將軍宣下ノ拜賀トシテ車ニ
駕シテ朝ニ入玉フ

行列

一番

ふきぬき同　一人　一人　一人
一人　一人　一人
ふきぬき

かるかや同　一人　一人　一人
一人　一人　一人
かるかや同

二番

御物荷　同長持　一人　一人
御物荷　同長持　一人　一人

公人朝夕長刀權阿弥傘持

侍同　侍同　侍同　侍同

三番御先行

右長刀　小者日日侍　小者日日侍　青山常陸介忠成

左長刀　小者日日侍　小者日日侍　板倉伊賀守勝重

四番隨身衆

右　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　島田兵四郎

左　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　小者日日口付　年礼郷右衛門

十徳白布帯　傘持　侍日日　侍日日　侍日日　侍日日　カさて す

十徳白布帯　傘持　侍日日　侍日日　侍日日　侍日日　カさて す

青山善四郎　成瀬清吉　岩瀬吉兵衛

内藤右衛門　神原隼之助　河口長三郎

山寄左馬允　古田兵部丞　戸川肥後守

佐藤駿河守　中川修理大夫　滝川豊前守

山城宮内少輔　佐々信濃守　金森出雲守

佐々淡路守　稲葉蔵人　津田長門守

竹中伊豆守　池田備後守　三好因幡守
毛利伊勢守　三好丹後守　寺沢志ゟ守
佐久間河内守　渡辺筑後守　藤堂佐渡守
冨田信濃守　水野河内守　脇坂淡路守
徳永左馬助　能勢伊与守　本多常陸ゟ
土方丹後守　生駒左近大夫　桑山伊賀守

本多大学助　田中隼人正　内藤若狭守
水野市正　脇坂主水正　土屋民部少輔
新庄越前守　古田左近大夫　北条左衛門大夫
鍋島和泉守　諏訪因幡守　柴田筑後守
永井信濃守　高木主水正　津田丹後守
溝口伊豆守　鳥居土佐守　羽柴壹岐守

堀伊賀守　日下部伊予守　松平右兵衛
堀淡路守　夫川内膳正　土方河内守

水野隼人正　板倉周防守　土井大炊助
牧野豊前守　西尾因幡守　渡辺山城守

井伊掃部助
大久保加賀守

御長刀
布衣　安藤次右衛門
日　小沢瀬兵衛
日　久永源兵衛
日　倉橋内匠

布衣　松平勘助
日　安藤千十郎
日　本多百助
日　松平助十郎

布衣　服部仲
日　服部千十郎
日　渡辺半四郎
日　小栗庄二郎

大越内膳正　久貝忠三郎　中根善八郎　高しき乾日日

神尾五兵衛　小栗甚六郎　今村彦兵衛　高しき乾日日

御傘持　影山九助　長谷川讃岐　高しきの乾日日
内藤甚五郎　山岡五郎作　高しき乾日日

嶋田庄五郎　山口小平次　三宅半七郎　ふしきの祝日

河村善爺　奥津久七郎　天野左兵衛　ふしきの祝日

御鉄役　酒井富内大輔家次

十徳白布帯　小者　小者　小者　小者

傘持

七番

騎馬諸大夫衆

長刀　ちゃうきゝ小もの　小者　日々侍　日々　日付

小笠原信濃守忠備

十徳白布帯　侍　侍　侍　侍

傘持

カさゝす　侍　侍　侍　侍

長刀　小者　日々侍　日々　日付

松平安房守信吉

十徳白布帯　侍　侍　侍　侍

傘持

カさゝす　侍　侍　侍　侍

松平丹波守康長　松平甲斐守忠良　小笠原左衛門
大夫信之　松平周防守康重　本多出雲守忠朝
本多伊勢守康紀　牧野駿河守忠成　皆川志摩
守隆庸　内藤左馬助政長　鳥居左京亮忠政
大久保相模守忠隣　平岩主計頭親吉　榊原式部
大輔康政　酒井右兵衛大夫忠世　右康長ヨリ忠世迄各供行列忠備信吉同例也依テ略之

八番　塗輿之衆

米澤中納言上杉景勝　京極高次
若狭少将　松平大隅守家久
薩摩太将　松平上総介忠輝
河中嶋蔣　出羽守義光
最上侍従　松平飛弾守秀行
會津侍従　毛利宰相　甲斐守秀元
安芸太将　福島左衛門大夫正則
大寄少将　松平陸奥守忠宗
秋田侍従　佐竹右京大夫義宣
越後侍従　堀久太郎秀治
加賀侍従　松平筑前守利常

歩行諸大夫　烏帽子著　敷革持　傘持

五月小

一日　将軍　宣下ノ賀儀トシテ諸大名各群参シテ
台徳院殿ニ謁シ是ヲ祝シ奉ル

十一日　台徳院殿御名代トシテ忠輝（千時十二歳）大坂ニ赴
キ此日伏見ニ帰リ玉フ

十三日山内土佐守一豊カ養子（実ハ山内伊賀亮カ子）伏見ノ城ニ登
テ　大神君及ヒ　台徳院殿ニ始テ謁ス　勅命ニ依テ對
馬守ニ任シ松平隠岐守定勝カ女ヲ　大神君御養
女トシテ對馬守ニ嫁セシメ玉フ　于時　大神君ヨリ御
腰物（備前包平）御服指（来国光）　台徳院殿ヨリ御服指
（新藤五ノ国光）ノ對馬守ニ賜ル又　大神君ヨリ御腰物（則重）
ヲ土佐守ニ賜ル

十五日　台徳院殿伏見ノ城ヲ出御江戸ニ赴セ玉フ

六月大

四日 台徳院殿江戸ノ城ニ還御

七月小

五日伏見ノ本城ヲ後セシメ玉ハンカ為　大神君西ノ
丸ニ渡御アリ

九月小

十五日　大神君伏見ヲ出玉テ永原ニ着御
十六日佐和山ニ着御而ニ依テ此ニ二日御滞坐
十九日赤坂ニ着御
廿日岐阜ニ着御昔山内土佐守一豊卒去ス六十歳

廿一日稲葉山ニ猟シ玉フ
廿二日清洲ニ着御此ニ二日御滞留
廿三日忠吉ノ家ニ渡御有相撲ヲ見玉フ
廿五日岡崎ニ着御此ニ四日御滞坐

十月小

一日　大神君中泉ニ着御此所ニ狩シ玉フ
十七日田中ニ着御此ニ四日御滞坐
廿二日駿府ニ着御
廿四日三島ニ着御
廿三日清水ニ着御
廿五日小田原ニ着御

廿六日藤沢ニ着御　　廿七日神奈川ニ着御
廿八日　大神君江戸ノ城ニ還リ入玉フ
十一月大
十七日　大神君忍川越ニ狩シ玉フ
十二月大
十五日南海洪波八丈島ニ大山一夜ニ涌出ル
廿六日　大神君江戸ニ還御
此年　大神君ノ鈞命ヲ奉テ浅野彈正少弼長政カ
女ヲ以テ松平越中守定綱ニ嫁ス　大神君ノ台命ニ
依テ島津陸奥守忠恒カ女ヲ松平隠岐守カ嫡子河
内守定行ニ嫁ス　大神君命有テ曰島津ハ至家タ
ルノ間定テ嫁娶ノ重儀ヲ備ヘシ仍テ阿茶ノ局
一位ト号ス并ニ侍女十四輩ニ仰テ婚礼ノ儀式ヲ執シメ
玉フ亦村越茂助日下部兵右衛門尉ニ命テ婚礼ノ
資用ヲ整シメ玉フ榊原式部大輔康政カ女ヲ
大神君養女トシテ池田輝政カ嫡子右衛門督利隆
後武蔵守ニ改ム輝政カ室家ハ　大神君ノ御娘
タリト云ヒ利隆別腹ニシテ中川瀬兵衛尉清秀カ孫ニ　嫁セシメ玉フ
青山播ノ守忠成秉興ヲ役ス土井大炊頭利勝御

貝桶ヲ役ス安藤
喜之助等是ニ從
長政黒田筑前守
浅野紀伊守幸長
助喜明等馳走ス
左文字 御馬二疋利隆
此年江州栗田郡
五千石在京ノ料ト
台徳院殿ノ命ヲ

對馬守重信鵜殿兵庫助伊丹
其婚礼最モ美也浅野彈正
饗食膳ノ相伴ス加藤肥後守清正
蜂須賀阿波守至鎮加藤左馬
大神君ヨリ御腰物清江御脇指
賜ル
日野郡野洲郡ノ内ニ於テ食邑
ニテ酒井雅楽頭忠世ニ賜ル
奉テ山口但馬守重政大番頭

ト成ル
一柳監物直盛カ
シテ始テ 大神君
ニ謁ス直家此年
八十余人ノ旅資

次男直家後美作守ト号ス駿府ニ参候
ニ謁シ又江戸ニ至テ 台徳院殿
ヨリ質トシテ江戸ニ在リ毎日
ヲ賜ル

家忠日記追加巻之十八終

家忠日記追加巻之十九　自慶長十一年至同十四年

慶長十一年丙午

正月大

一日江城ノ賀儀例ノ如シ

廿八日藤堂和泉守高虎カ嫡子高次江戸ニ参シテ始　台徳院殿ニ謁シ命ニ依テ大学助ニ任ス

于時　台徳院殿ヨリ御腰物兼光　御脇指国光

大神君ヨリ御脇指則重ヲ大学助ニ賜ル　是ヨリ先大学助伏

平井文庫

見ノ城ニ於テ
大神君ニ謁ス

二月大

八日　大神君伊達正宗カ家ニ渡御アリ御膳物
長光ヲ正宗ニ賜リ其子忠宗ニ御膳物大原真守ヲ賜ル
又正宗ニ常州龍ヶ崎ノ地ヲ賜ル

三月小

一日江戸ノ城経始藤堂和泉守高虎縄張ヲス
諸国ノ人夫ヲ以テ是ヲ築カシム
十五日　大神君江戸ノ城御首途洛ニ赴セ玉フ
十六日藤沢ニ着御
十七日小田原ニ着御
十八日三島ニ着御
十九日清水ニ着御
廿日駿河ニ着御城地ヲ御巡見アリ
廿五日駿府ヲ出玉フテ田中ニ着御
廿六日中泉ニ着御連日雨降ニ因テ此ニ二日御滞坐

四月大

一日　大神君名護屋ニ着御
二日岐阜ニ着御　三日赤坂ニ着御
四日佐和山ニ着御　五日永原ニ着御

六日膳所ニ着御　　七日伏見ノ城ニ入玉フ
廿八日　大神君參　内即日伏見ニ還リ玉フ
此月榊原式部大輔康政病ニ臥ノ由　台徳院殿上
聞ニ達ス依之酒井雅楽頭忠世土井大炊頭利勝
ヲ病中ニ付ケ置レ醫師延壽院玄朔玄鑑等
台命ヲ奉テ療養ヲ加ル其間上使ヲ屢賜テ
病體ヲ問セ玉フ
此月細川越中守忠利侍從ニ任ス
五月小

十四日榊原式部大輔康政上野国舘林ノ城ニ於テ卒
去ス五十九歳　台徳院殿ヨリ阿部備中守正次
ヲ上使トシテ喪ヲ問セ玉フ
六月大
三日水谷伊勢守勝俊卒ス六十五歳
七月大
廿七日　大神君伏見ヨリ洛ノ二条ノ城ニ入玉フ
八月小
十一日　大神君參内義利（後義直ト改ム）従四位下ニ叙

ニ右兵衛督ニ任ス同日頼将（後頼宣ト改ム）従四位ノ下ニ
叙シ常陸介ニ任ス
廿六日西尾隠岐守吉次卒去ス七十七歳
廿七日　大神君伏見ノ城ニ還御
九月大
一日嶋津忠恒伏見ノ城ニ登テ　大神君ニ謁ス此時
忠恒ニ松平ノ姓ヲ賜リ并ニ御諱字ヲ拜受シテ
家久ト号ス
廿一日　大神君伏見ノ城御首途東国ニ赴セ玉フ
此時城州追分ニ於テ保田甚兵衛尉則宗始テ
大神君ニ謁ニ其日江州水口ノ御旅館ニ候ス小堀遠江
守ニ命テ本領三千石ヲ則宗ニ賜ル
廿三日江戸ノ本城新ニ成ル　台徳院殿是ニ移リ玉
フ君羊臣参賀ス
十月小
六日　大神君駿府ニ渡御
十一月大
四日　大神君川越ニ御放鷹アリ

此月常州下妻ヲ頼房ニ賜ル
廿八日堀太郎左衛門尉秀重卒去ス七十五歳
此年酒井与七郎忠利従五位下ニ叙シ備後守ト
浅野弾正長政ニ真壁五万石及江州愛智郡
石ヲ賜ル内藤豊前守信成ニ江州長濱ノ城ヲ
岡田内記後備前守ト号始テ台徳院殿ニ謁ス岡田氏ハ
神尾ト号ス大神君ノ侍女一位ノ局内記ヲ郡改メ
子トス故ニ神尾刑部少輔ト兄弟ト成ル依ニ神尾ト改ム刑部少ハ一位ノ局カ實子也食テ
榊原内記照久勅命ニ依テ此年駿州久能ノ城ヲ移

此年諸州ノ牧伯ニ命シテ禁裏ノ四面ニ石ヲ宜シ
ム秀康是ヲ司ル
古田兵部少輔重勝卒ス四十七歳

慶長十二年丁未

正月小

一日江城ノ賀儀例ノ如ク諸士参賀ス
廿五日駿府ノ城経営ニ依テ諸国ノ人夫駿州ニ至
テ群参ス

二月大

十七日駿府ノ城経始下野守忠吉（大神君ノ四男）江戸ニ来テ
大久保加賀守忠常カ宅ニ寄宿セラル
廿八日忠吉重病ニ臥ス依之　大神君忠常カ家ニ
渡御有テ彼ノ病ヲ問セ玉フ
廿九日　大神君江城ヲ出玉テ駿府ニ赴キ玉フ途
中相州中原ニ御放鷹此地ニ數日御滞坐

三月小

五日従三位左近衛権中将忠吉逝去（薩ノ守姫名下野守行
年八歳）其陪臣石川主馬助稲垣将監中川清九
郎弼ス小笠原監物ハ故有テ松島ニ蟄居
スト云ヒ忠吉ノ逝去ヲ聞テ江戸ニ来テ増上寺ニ
於テ殉死ス佐ニ喜蔵亦彼カ死ヲ追フ
九日天野三郎兵衛尉康景駿府興国寺ノ城ヲ捨
テ逐電ス其故ハ康景カ領地ノ竹ヲ伐セ家作ノ為
ニ積置キ軽卒ヲシテ是ヲ守ラシムルノ処ニ御領処
田原ノ郷民此竹ヲ盗取ルノ間番ノ軽卒其盗人
ノ中張本人ヲ殺害ス残黨遁レ去テ代官井手甚

助ニ訟フ則丹手康景カ許ニ使ヲ遣シ御領処ノ
郷民ヲ代官ニ断ヲ尽サス卒爾ニ殺害スルノ条重罪
タリ速ニ番ノ軽卒等ヲ誅スヘキノ由ヲ告ル康景聞
テ盗賊ヲ以テ殺ス是古今ノ定法也何ソ重罪ト云
ハン其上彼軽卒等私ノ意趣ヲ以テ郷人ヲ殺ニ非
ス康景下知ヲ加ヘテ是ヲ殺ス若シ此事誤ニ於テハ
康景コソ罪ニ行レンスレ全ク軽卒等カ咎ニアラサル
ノ由ヲ返答ス丹手私ノ思慮ニ不能此由ヲ　大神君ノ
上聞ニ達シ郷人全ク行ヲ盗ミス無實ノ非ニ依テ是

ヲ殺スノ処ニ康景我意ヲ振舞テ彼ノ軽卒ヲ誅セ
サルノ由ヲ説訴ス　大神君御憤有テ康景ニ於テ
不義ノ所為ハ有ヘカラス若シ説者ノ偽ル所カ猶後
日ニ御糺明有テ其實否ヲ定ラルヘキノ御旨也本
多上野介正純命ノ重キ旨ヲ康景ニ告テ云ク譬ヒ
此事理アルト云ヒ上ニ對テ決断ニ及ハン旨宜シカラ
ス曲テ彼軽卒ヲ斬罪ニ御憤ヲ休ンヲ然ルヘキノ
由ヲ諫ル康景カ云ク理ノ直ナルヲ以テ非ノ曲レルニ変
スルヲ勇士ノ道ニ非ス所詮身ヲ退クニハ不如ト云

テ遂ニ興国寺ノ城ヲ奔テ遂電ス

十一日　大神君駿府ノ城ニ入リ玉フ

閏四月小

一日江戸ノ城経始

八日權中納言秀康（大神君ノ二男）越前国ニ於テ逝去（三十四歳）

其陪臣土屋左馬助長見右嵩門殉死ス

廿四日朝鮮ノ三使江戸ニ来ル（信使呂祐吉　副使慶還　從事丁好寛）

廿六日右兵衛督義利ニ甲州ヲ轉テ尾州ヲ賜ル

廿九日松平隱岐守定勝ニ命シテ伏見ノ城ヲ守ラシメ玉フ

五月大

六日朝鮮ノ使　台德院殿ニ謁ス　大鷹五十連

人參二百斤　幅段二百卷　虎皮三十張　豹皮二十張

青皮十張　白苧布三十匹　黒麻布三十匹

花席二十枚　紙五十帖　献ス

十一日　台德院殿ヨリ長刀十五及ヒ白銀六百枚ヲ朝

鮮ノ三使ニ賜ル

十九日朝鮮ノ三使駿及清見寺ニ至ル

廿日朝鮮ノ三使　大神君ニ謁ス　人參ノ六十斤

白苧布三十匹　蜜百斤　蝋百斤ヲ献ス
大神君ヨリ鎧三領　太刀三柄ヲ三使ニ賜ル
廿八日尾州犬山ノ城ヲ平岩主計頭親吉ニ賜ル　親吉義
利ニ代テ清洲ノ城ヲ守ラシメ及国中ノ政事ヲ聞シメ玉フ

七月小

三日駿府ノ城新ニ成ル　大神君是ニ移リ玉フ列侯以
下各賀儀ヲ献ス　台徳院殿ヨリ酒井右兵衛大夫忠
世ヲ御使トシテ駿府ニ来テ御遷居ヲ賀ス（今日忠世名ヲ雅楽助ニ改ル依之青山雅楽助大蔵少輔ニ改ル）
廿七日石川長門守康通卒ス

九月大

十一日松平出羽守忠政（大須賀）卒ス　二十七歳

十月小

四日源和子江戸ノ城ニ御誕生（台徳院殿ノ御娘元和六年六月廿七日御寛永元年十月廿八日中宮同六年十月九日東福門院ノ号ヲ蒙リ玉フ）
廿日　大神君駿府ヲ出玉フテ江戸ニ赴キ玉フ
十四日　大神君江戸ノ城ニ入リ玉フ
廿八日　大神君台徳院殿ノ御営中ニ渡御

十一月大

一日 大神君江戸ヲ出玉テ浦半忍川越ニ御放鷹アリ

十二月小

十二日 大神君駿府ノ城ニ還リ入玉フ

廿二日 駿府ノ城悉ク失火

廿四日 駿府ノ城火災ニ依テ是ヲ奉リ問事ナカレト諸国ニ奉書ヲ賜ル

此年高木主水正次ヲ大番頭ニナル 青山善四郎重長ヲ足軽特筒頭ニナサル 是サキ歩行頭

戸田尊次従五位下ニ叙シ土佐守ニ任ス 池田長常(千時七歳池田備中守カ子)従五位下ニ叙シ出雲守ニ任ス

此年池田右衛門督利隆始テ江戸ニ参ノ候シテ台徳院殿ニ謁シ松平ノ姓ヲ拝受シ武蔵守ニ任ス

于時 台徳院殿ヨリ御太刀長光御腰物国光御脇指左安吉ヲ武蔵守ニ賜ル其後利隆ニ暇ヲ賜ルノ時御馬二疋御鷹白銀呉服等ヲ被下利隆録倉一覧致スヘキノ旨鈞命ヲ蒙リ案内者トシテ鵜殿兵庫頭ヲ相副ラル録倉一見畢テ後

駿府ニ至テ　大神君ニ謁スル時　大神君ヨリ御
鷹御馬ヲ利隆ニ賜ル
此年渡辺山城守大番頭台命ヲ奉テ伏見ノ城ヲ
警衛ス是ヲ伏見ノ城三年番ト云フ　是ヨリ大番頭一人代ゝ是ヲ
勤ム元和三年ヨリ高木主水正阿部左馬助二人是ヲ勤ム同四年
水野備後守牧野内匠頭是ヲ勤ム元和五年松平豊前守松
平出雲守二人大坂ノ城番ヲ勤ム是レ大坂番ノ始メナリ

慶長十三年戊申

正月大

一日江城ノ賀儀例ノ如シ
二日　台徳院殿ヨリ酒井家次御使トシテ駿府ニ
至テ新正ヲ祝ス此日秀頼ヨリ織田左門頼長歳
首ノ使トシテ駿府ニ来賀ス
廿四日　大神君田中ニ御放鷹アリ
廿七日高力河内守清長卒ス七十九歳

三月小

十一日駿府ノ城田禄ノ後経営成ル
大神君是ニ移リ玉フ

六月大

筒井伊賀守定次カ不義ヲ中坊飛騨守秀祐駿
府ニ訴フ依之伊賀国ヲ没収セラル

七月小

十七日叡山ニ寺領ノ印ヲ賜ル
比叡山延暦寺近江国志賀郡ニ内所ニ於各
五千石朝廷ヨリ永代ニ寄附ス一ノ宮全ク奢
ニ帰セシメ給ヒ
廿三年七月十七日

山門三院僧徒代

八月大

六日蹴鞠道ノ義ニ付テ　大神君及　台徳院殿法
式ノ印ヲ飛鳥井宰相ニ賜ル
蹴鞠道ニ義賀茂ノ氏松下ノ子孫ニ変ニ而
同様家人ノ流曲ニ成ル故ニ色目ノ格ノ義
級有級差異無級紫革用袴等同出江
上秀上京上ノ名ノ一切不可名乗旨
新古代ニ地到用後也　右ノ通ノ事ハ者

気曲事ニ付向後弟子而蹴曲足
[illegible]可申旨被仰付

享保十三年戊申
八月六日
飛鳥井宰相殿
家[illegible]

蹴鞠道ニ於テ賀茂松下弟子之
内[illegible]人ニ於蹴曲足可着之色目
及紋葛革無紋紫革閑積ゟ
其上全緋一切不可着之旨
勅[illegible]

明後也
右之外之事相背儀出来之ハ向後
曲足お被召放之急度可申付[illegible]

享保十三戊申年
八月六日
飛鳥井宰相
[illegible]

八日叡山ノ法式七ヶ条ヲ賜ル
一山門前徒不勤学道者住坊不可叶
但従寺與住山僧弁坊舎建立

為御子可有用法事
一修菊子及其為ニ行儀於不律ニ遠ニ存
新山事
一顕密ニ名宝為学匠可抽研事
一為一人二坊三坊抱之輩ニ坊可書出事
一坊領其位相応外不可有競申事
一坊舎并領知ニ壹貫貳貫ニ一切不可有事
一京院ニ安徳連署以堂塔お企邪義ニ上聞事
右ニ條ニ堅ニ可被禁止之也

芸州十三代申年
八月小日

十日　台徳院殿江戸御首途駿府ニ赴キ玉フ
十八日　台徳院殿駿府ニ着御　大神君ニ謁シ玉フ
廿五日　大神君　台徳院殿ヲ本城ニ饗シ玉テ行平
ノ刀ヲ　台徳院殿ニ進セラル
此月藤堂和泉守高虎ニ伊予国ヲ轉テ伊賀国
及ヒ勢州ノ中ヲ賜ル領地其數旧ノ如シ

九月大

三日　台徳院殿駿府ヲ出テ江戸ニ赴キ玉フ
十二日　大神君駿府ヲ御首途江戸ニ赴キ玉フ
十八日　大神君江戸ノ城ニ入玉フ

十月大

廿日内藤修理亮清成卒ス　五十四歳

十一月小

四日法式ノ印ヲ成菩提院ニ賜ル
成菩提院法度
一天下安全御祈念長日護摩不二ノ油断事
一院領ニ成其住持ニ外不可有違乱事
一院領ニ臺所ニ無奉公ニ可ニ相止事
一為顕密ニ名字故以学匠一ノ名ヲ稱ス
一任先例ニ当寺ノ流儀ニ可ニ止行事
一門徒ニ者ヲ成不義ヲ申ス輩ハ可ニ追放ス
右條々堅ク可ニ相守ル者也仍如件
寛永十三丙申年
十一月四日

十二月大

二日　大神君江戸ヲ出玉フ

八日　大神君駿府ノ城ニ還リ入玉フ

廿四日吉良左兵衛義弼（後ニ上野ト号ス）侍従ニ任ス

此年松平隠岐守定勝カ領地ヲ改メ伏見ノ辺村木業薪ノ便有ノ地食邑一万石江州志賀高島二郡ノ内自由ノ地四万石ヲ賜ル常州笠間ノ城三万石ヲ転テ丹波国篠山ノ城食邑五万石松平周防守康重ニ賜ル西国南海ノ諸大名ニ命テ

旧城ヲ改築テ山陰道ノ鎮護トセラル

伊達正宗ニ松平ノ姓ヲ賜ル于時御腰物（来国光）ヲ下サル此年正宗塩竈六所ノ宮中ヲ再興ス

此年　大神君ノ鈞命ヲ受テ水野對馬守重仲常陸介頼将（後頼宣ニ改ム）家老トナル常州水戸ニ於テ采地一万石ヲ賜ル

此年松平成重従五位下ニ叙シ左近将監ニ任ス

松平弥三郎忠實従五位下ニ叙シ土佐守ニ任ス（後ニ外記ト改ム）

廿五日池田輝政カ次男藤松（大神君ノ御外孫）台徳院殿ノ
御前ニ於テ元服（于時十歳）松平ノ姓并御諱ノ字ヲ
賜テ松平三郎忠継ト号ス（後左衛門督ニ改ム）従四位下ニ
叙シ侍従ニ任ス于時御腰物（正宗）ヲ忠継ニ賜ル
同輝政カ三男藤五郎（大神君御外孫）台徳院殿ノ
御前ニ於テ元服（于時七歳）松平ノ姓并御諱字ヲ賜
テ松平宮内少輔忠雄ト号ス于時　台徳院殿ヨリ
御腰物御馬ヲ忠雄ニ賜ル

慶長十四年己酉
正月小
一日江城ノ賀儀例ノ如ク諸士参賀ス
台徳院殿ノ御使駿府ニ至テ歳首ヲ賀ス廿日秀
頼ノ使モ駿府ニ来賀ス
七日　大神君駿府ヲ出給テ田中ニ着御
十一日中泉ニ着御　十三日濱松ニ着御
十四日吉田ニ着御　廿日岡崎ニ着御
廿三日酒井忠勝（家次カ男）従五位下ニ叙シ宮内大輔ニ

任久

二月大　　廿五日清洲ニ着御

四日　大神君清洲ヲ出玉テ駿府ニ赴キ玉フ

十一日　大神君駿府ニ還リ入玉フ

此月酒井雅楽頭忠世ニ上州善養寺ニ於テ食邑五千石加賜セラル

廿一日島津家久　大神君　台徳院殿両君ノ命ヲ奉テ琉球国ヲ征伐セント欲ス樺山權左衛門尉久高ヲ首将トシテ平田太郎左衛門尉ヲ副将トシ軍士三千余騎蒙衛百余艘纜ヲ解テ琉球ニ発向シ大島ニ至テ着船シテ徳島ニ赴クノ処ニ嶋人千余人出向テ是ヲ拒ク嶋津カ兵士是ト戦テ首ヲ得事三百余級残ル嶋人皆降ル

三月小

五日寺領安堵ノ印ヲ座禅院及衆徒中ニ賜ル

當寺井白象寺門前是尾村神主社人屋敷等事ハ先規不可有相違旨被仰出候為山中無早賊之事猥今一統気遣有之

を可加制御の勅行社稷危殆の儀を
こ恐れ申

慶長十四年
三月五日
日光山
座禅院
同所法中

此月武州岩付城高力摂津守忠房カ居城焼失スルノ由江戸
ニ至テ注進ス
四月小

一日嶋津カ軍勢那覇津ニ至ル津ノ兵謀テ鉄鏁
ヲ以テ津ノ口ニ張リ是ヲ守リ拒ク島津カ軍勢
他ノ津ニ廻テ着岸シ陸地ニ上リ相戦ヒ三日味
方ノ兵戦死スル者凡百余人ニシテ遂ニ琉球ノ都ニ
入テ王城ヲ圍ミ急ニ攻討テ是ヲ破ル王及司官
等皆和ヲ乞テ降ル樺山平田王城ヲ堅ク囲テ
島津ニ此由ヲ告ル島津又駿州及江戸ニ檄ヲ飛
シテ注進ス
四日駿府ノ城賓殿ノ庭ニ人アリ四肢指ナシ弊

衣乱髪ニシテ惟ニ青蛙ヲ食フ所ヲ問来レハ手
ヲ以テ天ヲ指ス左右是ヲ殺サント欲ス　大神君命
有テ曰殺ス支ナカレ是ヲ城外ニ放ツ其行所ヲ知
ラス

五月大

一日制方ノ印ヲ照光院及聖護院ニ賜フ
三井寺領事近代寺務ニ分金不一の有れ
ども為安堵不わたし上洛ニお山出ず伐
採竹木勝手ニ樹形坊金門前寄宿等

今免除ニ年貢或所寄物ニ宿或行倒不
津出有可除事寺中境内可相禁
武士作法以ての外ニ居住ニ狩長日可相慎
狩猟ニ狩ぬ仲
寄ぬ十四年　五月朔日
照光院

陸奥国ニ可ト仕法ニ不申出
ニ義有法国山伏同前ニ上洛結構無
金剛寺金剛寺ニ法師以下一ニ力者

[illegible]

[illegible]

五月朔日　[illegible]

三日京極宰相高次卒去四十七歳

十日松平伯耆守忠一本姓中村卒ス二十歳嗣子無

ニ依テ其家断絶ス

古田大膳大夫重治一柳監物直盛ニ命テ伯耆

国ヲ守ラシメ玉フ重治直盛伯州ニ在番スル

翌年ニ至ル

廿五日琉球ノ国王島津ニ降テ薩州ニ来ル

七月大

五日薩摩少将琉球国ヲ征伐シ中山王ヲ擒ニ

シ薩州ニ至ル彼王ヲ携ヘ参候スヘキノ由ヲ注

進スルニ依テ　大神君是ヲ賞セラレ則琉球国

ヲ島津ニ賜ルノ旨御書ヲ下サル亦

台徳院殿ヨリ其軍功ヲ美セラレ薩摩少将

及羽柴兵庫入道嶋津修理入道ニ御書ヲ賜

琉球国人数不経日数事[illegible]

其上国王降参之旨最厚御之仕合ニ付
可申

安政五戊午年
七月十五日　　東忠
　　相葉左内殿

琉球国王義兵不得已一戦御意
相立討滅し制国王降参ニ付三日宮
以下高其他不日ニ帰国ニ付被仰渡
此節御出ニ付御渡ニ

安政五戊午年
七月十五日　　東忠
　　薩摩守様

琉球国王義兵相御意ニ相立討滅し弾
国王降参ニ三日宮以下近日出発ニ付
滅以来有之候ニ付四日御渡ニ

安政五戊午年
七月十五日　　東忠
　　相葉左内殿

琉球ニ義早速届申ニ付
ニ付渡し候ニ付

等閑ニ存ぜざる
慶長十四年七月七日　家康

十四日城州伏見ノ城警衛ノ輩ニ下知状ヲ賜ル
藤ノ中将殿

一伏見ノ城中ハ番衆ニ亦人数ヲ合セ申ス事
一郡番ハ武具并道具ニ至テ申ス
一南ノ番ハ城ノ上方一番人抱ヘ申ス事
付城中ニ近高人出入ニ於テハ申ス事

一自然振舞ヲ致シ一ケ三ヶ所ニ至テ来ル者ハ
一張場ニ一ツ大ノ義上下共ニ不ル事止事
一少シモ用心ヲ申ス事有ル間敷ト存ル也
右条々聊ノ不ル
慶長十四年七月十四日　安芸殿
土井大炊助
酒井雅楽頭
松平伊豆守殿
山口修理亮殿

十五日寺法ノ印ヲ下野国専修寺尭真僧正ニ賜ル
下野国高田専修寺住持職ノ事幷法印
寺宮任偏旨ノ事ニ進退ノ事有ル歟ノ
由ノ件

文安十四年
七月十五日
高田専修寺尭真僧正ノ訴

八月小
四日松平忠一本姓中村去夏卒テ嗣子無ニ依テ朝比
奈源六郎久貞忠三郎弓氣多源七郎検使トシテ
伯耆国ニ在リ依之下知状ヲ賜ル

陽ヽ

一寺社ヽ軍町人百姓ヽ対シ左ヽ人ヽ手ヲ出サル事
一猥ノ事代官代官代官未書事
一百姓以下他ヽヽ出ヽヽ
但地頭代官所ヽヽ義有ルヽヽ 上様幷当
況其ヽヽ年貢ヽヽ
右ヽ陽ヽヽ
伝 所下知如件

文長十四年　　相模守
八月四日　　佐馬寺

岡部内膳正長盛ニ丹後国亀山ノ城二万石ヲ賜ル
旧領合テ三万二千石ヲ領ス
十八日制法ノ印ヲ東寺ニ賜ル

東寺諸法度

一東寺ニ学問ヲ以ノ横合ニ成ル可ク学文相續
若シ学ヲ以テ仁義ヲ捨テ又習律ニ住スル
一類ノ輩者一宗ノ勘学ノ儀也 但経教法度

教ニ乖ク儀ナカル也不残一冊以目録令写納
于高野山青蓮寺ニ経蔵ニ学者ノ用也
一可ニ古論ニ学ノ家ヲ成ル所学ノ
右東寺酬ニ言教相ニ而学ノ及退智ニ而
右ノ両部ノ三昧ノ学問ヲ寺領ニ不事不ノ
叶ノ事ニ可ニ学ノ無行ニ也

文長十四年
八月十八日

廿八日関東真言宗古義諸寺ヘ法式印ヲ賜ル

関東ニ言宗ハ義真法ヲ弘ム法ヲ授シ日浪無不可有所職

一寺ニ二所ヲ兼ル法ヲ授シ日浪無不可有所職

一本寺住山必可ニ三ヶ年ニ

一経ヲ本寺住山不学者不ル得ル

一お法義所ハ可他能化ト知高能不

一本寺住山ニ間吾宗ノ書ヲ可ル学ル

一能経ヲ者相ニ所ニ学ヲ可ル学ル

可ル許能化ト

一の常ヲ者伝法奥旨ヲ授ル行事ヲ

一お法ヲ踏シ一寺一山ヲ必可ル住学ヲ間ニ能

右九ヶ条但ニ可ル学ル也

寛文七年十四ヶ年

八月九日

関東法華宗家中

九月大

廿一日伊勢内宮遷宮アリ

廿三日大沢侍従基宿ヲ将ニ任ス

駿州田中ノ城轉テ武州河越ノ城食邑二万石酒
井備後守忠利ニ賜ル
廿七日伊勢外宮遷宮アリ
西国諸大名五百積以上ノ武者船相改メ請取ルヘキ
ノ旨九鬼長門守隆ニ命セラレ向井将監久永源
兵衛尉両人ヲ其検使トシテ是ニ相副フル守隆両使
ト共ニ泉州ニ赴キ西国ノ大船ヲ悉ク改メ駿州及江戸
ニ指上セ日ヲ経テ着岸ス此内池田輝政猶大船ヲ
賜ル紀伊国九ト号ス
翌年閏二月大船ノ中蜂須賀阿波守
稲葉彦六カ船二艘ヲ守隆ニ賜ル
十月大
八日久野宗安入道卒ス八十三歳俗名三郎左衛門尉宗能
廿六日　大神君善徳寺ニ御放鷹アリ其ヨリ後
三島ニ渡御アリ
廿九日石川日向守家成卒ス七十六歳
此日寺領ノ印ヲ鞍馬寺ニ賜ル
當寺門前境内山林地子銭人足等ハ
永々免許事

事全ク了寺納ス
寛永十四年
十月廿九日
鞍馬寺

十一月小

五日　大神君御不例ニ依テ三島ヨリ駿府ニ還リ玉フ
安藤帯刀直次ヲ御使トシテ江戸ニ赴カシメ御不
例重カラサル事ヲ　台徳院殿ニ告玉フ
廿日制法ノ印ヲ東寺ニ賜ル

為ニ言伝法興隆東寺殿酬高野山以信者
文武勤学ヲ更不可ス而已中院ヲ海
ニ信行義不律ニ仕ル古法宝ヲ
可ニ入寄学ヲ者持律住持ヲ也月ヲ以各
守ニ此ノ制

寛永十四年
十月廿九日
東寺長者中坊

寺法ノ印ヲ金剛峯寺ニ賜ル

當山上ヲ以て古法ヲ改め古法ヲ四ツ法ヲ
復ス名宝二十ケ所相傳ヲ中宝蓋
可ケ信ス勅ヲ奉ス
頂戴ヲ以家綱ヲ為ス
元和元年四月廿一日
十月廿一日
高野山金剛峯寺
岩月酒井忠勝従五位下ニ叙シ讃岐守ニ任ス
十二月大

五日大垣ノ城ヲ石川主殿頭總輔ニ賜テ石川家成ヲ跡ヲ
續シメ玉フ是ヨリ先キ家成カ男康通ニ大垣ノ城ヲ玉ルト云ヒ慶長
十二年七月廿七日康通ニ先テ卒ス故ニ家成ヲシテ大垣
ニ居ラシメ玉フ家成卒シテ後外孫總輔ヲシテ其跡ヲ
續シム總輔實ハ大久保相模守忠隣カ二男ナリ
九日有馬修理大夫晴信ニ命シテ長崎ノ海上ニ於テ
南蠻ノ船ヲ破ラシメ水底ニ沉ムル
十二日牧野右馬允康成卒去ス五十五歳
十五日島津兵庫入道今度琉球国ヲ賜ル謝礼トシテ
使者ヲ江戸ニ指越シ御太刀一腰御馬一匹端子十巻ヲ
台徳院殿ニ献ス依テ
台徳院殿ヨリ御書ヲ兵庫

入道ニ玉ハル

就先日琉球一昨ニ旨趣ヲ来ル内ヲ
戦ト事伝ヘシ太刀一腰馬一匹并端子十巻
他国ヨリ来ル西南方ヲ作ル可ト也

十二月十五日　秀忠

羽柴左近衛ノ頭殿

廿二日松平伊豆守信吉カ子兄弟　台徳院殿御前
ニ於テ元服ス嫡子（後山城守ト号ス）御諱ノ字ヲ拝受シテ忠国
ト号ス千時御腰物包永ヲ忠国ニ賜ル次男（後伊勢守ト号ス）御諱

ノ字ヲ拝受シテ忠晴ト号ス千時御脇指行光ニ賜ル

廿六日薩摩少将家久今度琉球国ヲ賜ル謝礼ト
シテ使者ヲ駿府ニ指越シ佛草花モリ花琉黄千斤
唐屏風ニ帖十巻ヲ　大神君ニ献ス依之往
大神君御書ヲ家久ニ賜ハル

琉球国可敬仰ス旨ヲ也祝儀ス
如ト仍ヲ為ト音信佛草花モリ花并琉黄
千斤唐屏風ニ帖十巻ヲ献ス祝儀ニ

十二月廿六日 薩摩ヲ移ス

此月駿州遠州ヲ賴宣ニ賜ル 二州總テ五十万石

同月常州水戸ヲ賴房ニ賜ル 二十万石

此月 大神君東国ニ御放鷹武州岩付ノ城ニ御旅館アリ城主高力摂津守忠房饗膳ヲ献ス

此春岩付ノ城西禄スルノ処ニ新ニ城郭殿舎ヲ營ス

大神君上覧有テ此城焼失ノ後幾ノクラサル処ニ新築早成御感有テ江城ニ還御ノ後忠房ノ

高力河内守長次ヲ上使トシテ白銀二百枚忠房ノ賜ル

此年江戸本城ト西ノ丸ノ間ニ新ニ舞臺ヲ作ラシメテ猿楽アリ桟敷ヲ構ヘサセ 大神君及ヒ台徳院殿上覧アリ御一門ノ歴々御譜代御家人諸大名命ヲ奉テ桟敷ニ列坐シ是ヲ見物ス各饗膳ヲ玉ハル

此年溝口伯耆守秀勝卒ス六十三歳

中坊飛騨守秀祐卒ス九十九歳

真田安房守昌幸高野山ニ於テ卒ス六十九歳

此年於路国ヲ轉テ伊与国喜多浮穴風早三郡食

邑三万二千石脇坂中務大輔安治ニ玉ハル下總国山川
采地一万五千石松平越中守定綱ニ賜ル
此年戸沢九郎五郎政盛従五位下ニ叙シ右京亮ニ
任ス于時　台徳院殿ヨリ御腰物（青江ノ直次ノ）政盛ニ賜ル
一柳監物直盛カ嫡子直重従五位下ニ叙シ丹波
守ニ任ス次男直家従五位下ニ叙シ美作守ニ任ス次
郎兵衛尉重政従五位下ニ叙シ伊豆守ニ任ス
此年松平武蔵守利隆カ男新太郎光政　備前国岡山ニ
於テ生ル　台徳院殿ヨリ牧野豊前守[illegible]

是ヲ賀シ玉フ御腰物（青江）御服指（信国）ヲ新[illegible]
時服白銀ヲ利隆ニ賜ル備中国ノ内ニシテ食邑千
石利隆カ室家ニ賜ル（シメ玉フ）利隆カ室ハ榊原式部大輔康政カ女
台徳院殿御養女トシテ利隆ニ嫁セ

家忠日記追加巻之十九　終